

シェリーとその周辺——II

(3) Sir William Hamilton (1730-1803)

加藤 芳子

1. 幼少時代

サー・ウィリアム・ハミルトン [以下ハミルトン] は、外交官で考古学者でもあった。いわゆる『英国人名辞典』*DNB* によれば、スコットランドで生まれた事になっていたが、最近出版されたデイヴィッド・コンスタンティン David Constantine によるハミルトンの『伝記』によると、1730年12月13日にテムズ川沿いのヘンリー-Henley の東部のパーク・プレイス Park Place で生まれた事がわかっている。

父親は第3代ハミルトン公爵の7男で、母親は第6代エイバーコーン伯爵の娘レイディー・ジェイン・ハミルトンで、父親は再々婚であった。彼らには6人の娘と4人の息子が生まれ、ハミルトンは末子であった。母親のレイディー・ジェイン Lady Jane はエネルギッシュな人で、皇太子フレデリック Frederick の寵愛を受けていて、愛人でもあったらしいので、皇太子の宮廷では権勢を振るい、新客が来ると皇太子は必ず彼女の息子ハミルトンを同席させたほどであった。この様なわけでハミルトンは皇太子の息子 [1738年6月生まれ、後の英国王ジョージ George 3世] と、異母兄弟のようにして育ったのである。

ハミルトンは貴族の子弟らしくロンドンのウェストミンスター・スクール Westminster School で学ぶが、大学に進学してはいない。父親が既に高齢で、末子だったせいと考えられている。

2. 軍隊

1747年1月から1748年10月18日まで彼は16才にして、第3近衛歩兵連隊の将校となり、カンバーランド公爵のもと、ネーデルランドでのオーストリアの継承戦争ではフランス・プロシア軍と戦い、7年戦争にも加わる。1757年9月には彼は7年戦争のためにコンウェイ將軍の副官としてワイト島のニューポート Newport からフランスのロシュフォール港沖に向かう。

この2つの戦争の合間にハミルトンは、イタリアからロンドンに来ていたフェリーチェ・ディ・ジャルディーニにヴァイオリンを習ったりして、芸術にいそしんでいた。

1757年にはロンドンでは芸術協会が創設され、1759年には大英博物館が一般公開される。ハミルトンは前者の会員に選ばれ、後者には後でナポリからギリシアやエトルリアの遺物を送る事になるのである。

フレデリック皇太子が亡くなり、まだ13才にも満たないジョージが英国皇太子となると、異母兄弟として育ったハミルトンは皇太子の侍従に任命される。おかげで収入は増えるが、この間1752年12月にはパリで母が亡くなり、1754年には父も亡くなる。末子の彼は、将来の事を考えざるを得なくなる。しかも1757年にロシュフォールに出陣する前に、彼にはレイディー・ダイアナ・スペンサー Lady Diana Spencer という好きな女性がいたようだが、彼女は別の人と結婚してしまうのである。軍隊に向かない事を認識して1758年1月26日に彼はキャサリン・バーロウ Catherine Barlowe と結婚し、5月には軍を退役している。

3. 結婚

キャサリン・バーロウは、ペンブルック Pembroke 州のヘイヴァーフォードウエスト近くのスレベック出身のジョン・バーロウの娘で、母はアン・バーロ

ウで、サマーセット Somerset 出身、旧姓はスクラインと言った。アンはバーロウの2番目の妻で1735年に結婚したのだが、1739年に夫が亡くなり、ペンブルック州の地所を遺産として受け継ぐ事になった。アンは再婚せず、1738年に生まれたキャサリンが唯一の子供だったので、この遺産を継ぐ事になる。

母娘は仲が良く、ロンドンのクラージズ・ストリートに住み、ハミルトンはカーゾン・ストリートに住んでいて、どちらの家もピカディリー Piccadilly のグリーン・パーク Green Park 側のはじめにあり近かった。この結婚によりハミルトンは土地と収入を得ることになる。しかし結婚の2年後の1760年にキャサリンは亡くなってしまう。

1751年から1756年までハミルトンは皇太子の侍従だったが、1760年に皇太子が国王となると、ハミルトンも同時に国王の侍従となる。これでまた収入が少し増える。1761年の選挙で彼はサセックス Sussex 州ミッドハーストのエム・ピー2人の1人として国会議員となるが、目立った事は何もしていないようである。

ロンドンに住んでいた頃、ハミルトン夫妻は音楽会を催したり、絵画を売買したりもしていて、1764年6月末頃にはかのモーツァルト Mozart が彼らの家に泊まっている。6年後にナポリで彼らは再会することになるし、ゲーテ Goethe もハミルトン邸に招かれた事があるのは知られている。

1762年から63年にかけての冬はすごい寒さで、テムズ河は凍ってしまい、ロンドンのトウィックナム Twickenham の辺りは馬車でも渡れるぐらいだった。ハミルトンの妻キャサリンは喘息持ちで、この冬はこたえ、春になっても回復しなかったので、ハミルトンは暖かい所に連れていきかけたようで、新しい職を海外に探している。新しい首相ジョージ・グレンヴィルと国王のおかげで、運良く彼は、高齢のために帰国するサー・ジェームズ・グレイの後を引き継ぎ、ナポリ Napoli [イタリアの地名はイタリア語の表記とする] に赴く事になる。

4. ナーポリへ出航

ハミルトン夫妻はまずペンブルック州のヘイヴァーフォードウェストから6マイル程東のコルビー・ムーアにある屋敷に戻って準備を整えると、ロンドンに戻り、1764年7月13日に国王に謁見して礼を述べ、8月31日付けで、両シチーリア王国駐在英國特命全權公使の任を受ける。彼の前任者は、1753年に任命されたグレイ卿ただ1人であった。

ハミルトン夫妻はフランスを経由してイタリアに向かう。パリで彼らはナーポリ公国の大使の秘書フェルディナンド・ガリアーニ神父に会う。彼はハミルトンのためにナーポリにいるタヌッチ首相に手紙を書いてくれる。そしてヴィンケルマン Winckelmann が出版したばかりの、ヘルクラネウム Herculaneum での発掘の報告書のフランス語版をハミルトンに献呈している。

10月19日にハミルトン夫妻は、フランス南部のリヨン Lyon で衣装や食器類などの買い物をすると、マルセイユから出航するが、悪天候のためイタリアのレグホーン Leghorn に寄港せざるを得なかった。しかしこの間フィレンツェ Firenze を訪問した時に、英国大使のサー・ホレイス・マンが歓待してくれる。大使は作家のホレイス・ウォルポール Horace Walpole, 1717-97 からハミルトンの事を聞いていたのである。キャサリンの喘息がおさまると、夫妻はレグホーンを出航し、1764年11月17日にナーポリに到着する。

5. ナーポリ着任

ハミルトンが赴任した頃のナーポリについて概略すれば、両シチーリア王国は1734年にシチーリアとイタリア半島の南半分から成る王国としてオーストリアから独立する。スペイン王カルロス Carlos 3世はシチーリア Sicilia のパレルモ Palermo で即位するが、首都はナーポリに定めたので、ナーポリは芸術や学問が栄えた。彼のもとでサン・カルロ・オペラ座が出来、ポルティチ Portici

やカポディモンテ Capodimonte やカセルタ Caserta に宮殿が次々と建設され、アカデミーも次々と創設されていった。考古学の分野でも、ヘルクラネウムやポンペイ Pompeii の発掘が進み、発見された物は展示され、出版されていった。

カルロス 3 世は、ナポリとスペインの国王は 1 人で兼任出来ないという国際協定のために、異母兄弟のフェルディナンド 6 世が亡くなると、ナポリの王位を断念し、スペインの王位を継承した。カルロスは長男が精神薄弱だったために次男をスペインの跡継ぎに、3 男のフェルディナンドをナポリ国王にした。フェルディナンドは当時 8 才に過ぎなかったので、主に 1734 年以來カルロスの首相 First Ministero であったマルクイス・ベルナルド・タヌッチと、フェルディナンドの教師のサン・ニカンドロ王子の 2 人が、摂政政治をとった。

6. 火山学と考古学

ハミルトンは 1764 年から 1800 年まで、実に 36 年もの間、ナポリ公国宮廷駐在英國特命全權公使であったのだが、外交官として特に目立った事をした訳ではないようである。当時の英國はナポリには大した興味がなかった事も事実のようであった。

この 36 年の間ハミルトンは、ナポリ近くのヴェスーヴィオ Vesuvio 山やシチーリア島のエトナ Etna 山等の火山に数 10 回にもわたって登り、これらの火山の観察を自ら行い、イタリア人の画家に記録、スケッチさせ、1766 年には「英國王立協会」の研究員となり、同年から 1780 年までその機関誌『哲学会報』に論文を掲載して、これらの観察記録を報告し、1767 年には、イタリアで収集した火山性岩石や鉱物の標本を英國王立協会に送り、1776 年にはそれまでの論文をまとめて、イタリア人画家のピエトロ・ファブリス Pietro Fabris のたくさんのドローイングとともに、ついに『カンピ・フレーグレイ』*I Campi Phlegraei* なる本を出版する¹。これはたちまちベスト・セラーとなり、版を重ねていく。これらの論文とドローイングを、ロマン派の詩人シェリー P. B. Shelley,

1792-1822 は、恐らくイートン校時代の科学の教師リンド博士 Dr. James Lind, 1736-1812 によって紹介されていると思われる。²

ハミルトンは、1777 年には芸術家愛好家協会 Society of Dilettanti の会員となり、1783 年には考古学者協会 Society of Antiquaries の研究員にもなり、1799 年にはかのエルギン卿 Lord Elgin, Thomas Bruce, 7th Earl of Elgin, 1766-1841 にも助言をしたりしている。

1766 年に彼はナーポリでギリシアの壺を購入し、このコレクションを 1772 年に大英博物館に売却しているが、このコレクションの目録をダンカーヴィル D'Hancarville つまり P. F. Hughes が 1766 年及び翌年に出版し、これはかの陶芸家ジョサイア・ウェッジウッド J. Wedgwood, 1730-95 にも影響を与えたそうである。

1787 年にはゲーテ J. W. von Goethe, 1749-1832 がナーポリのハミルトン邸を訪ね、そのコレクションを見学し、ハミルトンの愛人であったエンマ・ハート Emma Hart、後の Lady Hamilton, 1761?-1815 の存在について、その『イタリア紀行』の中でコメントをしている。ハミルトンはエンマとは 1791 年にロンドンで結婚している。

1789 年及び 90 年にハミルトンは、シチーリアの墳墓から発掘されたギリシアの壺を購入し、1785 年にはポートランド・ヴァーズ Portland Vase を購入し、ポートランド公爵夫人マーガレット・キャヴェンディッシュ M. Cavendish, 1624?-74 に売却する。

7. 晩年

ハミルトンは 1772 年にはバース勲位を授かり、1791 年には枢密顧問官となる。1800 年にハミルトン夫妻は、ネルソン提督 Lord Horatio Nelson, 1758-1805 と一緒に帰国する。1802 年頃からエンマはネルソン邸の方に入り浸るようになり、ハミルトンは一時離婚も考えるが、1803 年には、妻エンマとネルソンに見守られて、息を引き取るのである。

ハミルトンはその遺産を全て甥のグレヴィルに残し、エンマには何も与えなかった。ネルソンも2年後の1805年に、トラファルガーTrafalgarの戦いで戦死するので、エンマの人生は悲惨なものとなり、彼女は極貧のうちにフランスで亡くなったという。

注

1. ハミルトン著の『カンピ・フレーグレイ』の内容については、以下の拙論を参照されたし。

加藤芳子、「Sir William Hamilton — 古典と科学の出会い」、日本ジョンソン協会編、『十八世紀イギリス文学研究、第2号、文学と社会の諸相』、開拓社、2002年、pp.363-381。

P. B.シェリーに対するハミルトンの影響に関しては、以下の拙論を参照されたし。

Yoshico Cato, “‘Ode to the West Wind’ and Volcanology”、札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』、第61号、2004年、pp.67-83。

2. リンド博士に関しては、以下の拙論を参照されたし。

加藤芳子、「シェリーとその周辺 — I」、札幌大学外国語学部紀要、『文化と言語』、第61号、2004年、pp.85-94。

参考文献

- . *A Dictionary of British and Irish Travellers in Italy 1701-1800*.
Compiled from the Brinsley Ford Archive, by John Ingamells, New
Haven and London: Yale Univ. Press, 1997. Published for the Paul
Mellon Centre for Studies in British Art.
- . *DNB*. London, 1893.
- Constantine, David. *Fields of Fire: A Life of Sir William Hamilton*.
London: Weidenfeld & Nicolson, 2001.
- Hogg, Thomas Jefferson. *The Life of Percy Bysshe Shelley*. London, 1933.
- King-Hele, Desmond G. 'The Lunar Society of Birmingham,' *Nature*,
Macmillan, 1966.
- King-Hele, Desmond G. 'Shelley and Dr. Lind,' *Keats-Shelley Memorial
Bulletin*, No. XVIII, 1967, pp.1-6.
- Schofield, R. E. *The Lunar Society of Birmingham*. O.U.P., 1963.